歴史的複核都市大津と坂本

―― その歴史地理的分析 ――

藤　岡　謙　二　郎

(1) はじめに

戦後の都市の概念は戦前のそれと異る。戦後の都市といえば，人口過密な非農業地域であったのが，戦後のそれは戦前の核をとりまいて，その中にバージェス的な圏構造（concentric zone structure）が形成されていることである①。つまり市域が拡大され，市域（city region）と都市域（urban region）とが必らずしも一致しなくなったことである。この傾向は昭和28年10月に町村合併促進法が施行されて以後のことであって当時 286 だった市の数も 1974年，すなわち昭和 49 年 1 月 1 日現在では 643 市をかぞえている②。従って都市の系譜や機能を考える場合にも，しかく簡単ではない。このため人口集中地区（Denseley Inhabited District＝DID）③が設定されたり，その市の性格を端的に示すには産業別人口の比率が問題になるのである。同様にその都市を歴史的発生によって分類する場合にも，戦前のように簡単に旧城下町や旧宿場町，門前町出身都市等とのみいい切れないようになった。すなわち歴史的都市の場合には中央の核をなすC. B. D (central business district）が，旧城下町だけといったいわゆる歴史的単核都市も存在するが，そうではなく，2つ以上の歴史的核が併存する場合もあるのである。大津市もそれであって，筆者はこれらの都市を歴史的複核都市と呼んでいる。すなわち現大津市の場合ではその名も港町や宿場町を兼ねた商業交通都市域としての浜大津と，膳所を中心とした旧城下町域，旧門前町坂本，それに今は廃墟都市となって核を形成はしないが，旧近江国府域や旧大津京域等現大津市域中には多くのふるい歴史的核が存在するのである。

本文ではこのうち大津市の坂本町を中心として，この歴史的核が現在にあっては大津市の中でどんな関係にあり，過去にあってはどうであったかを歴史地理学的に分析し，現歴史的広域都市たる大津市の性格を検討してみたいと思う。

(2) 広域大津市域の誕生と歴史的核

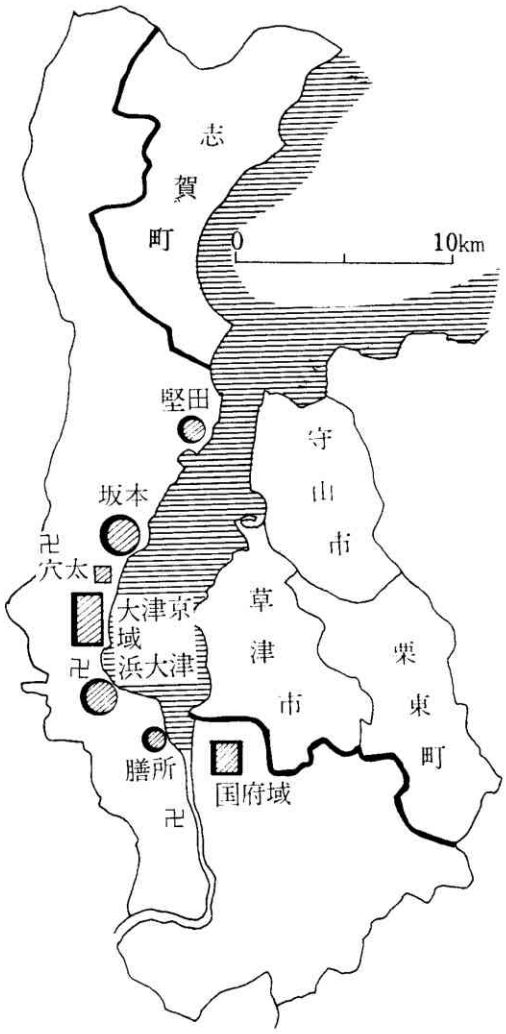
大津市の昭和48年6月現在の人口は182，159人である。明治31年10月に市制実施をみた当時の大津市域は現在の浜大津を中心とした中央地区のほか，平野，逢坂，藤尾地区をふくむ面積 14. 25km²，当時の人口にして32, 446人の歴史的な港町であった。当時もとより旧城下の膳所町との間には conurbation は形成されていなかった。

それが昭和7年5月になって近郊村の滋賀郡滋賀村を合併した。滋賀村はいうまでもなく湖西南部の旧大津京域である。ついで翌8年4月になって東の膳所，石山両町を合併することになった。さらに戦後の昭和26年4月には同じ滋賀郡湖西部の雄琴，坂本，下阪本の3町，湖南の大石，田上2町を，さらに同42年4月には瀬田，堅田両町を編入した。堅田もまた湖港であり，寺内町であるといった歴史的核をそなえている。かくて現在では大津市の面積は 304. 21km² で京都市域の約半分となっている。

ところで第1図に示した現大津域市域中に占める現存の歴史的核と今は廃墟化したそれを記入すると，まず前者では現大津市域の中央区を形成する浜大津と，本田氏7万石の城下町だった膳所の他に，日吉大社の門前町であり，かつ中世における延暦寺の外港だった上下両阪本町と上述の堅田町があげられる。

これに対して後者にはふるくは景行，成務，仲哀3天皇の都であった高穴穂宮があり，古代中世の北陸道への始発験であった穴太，さらにわずか5年間の天智天皇の都であった大津京域や近江国府の所在地等があげられる。しかしこの後3者は現大津市には何等関係のない廃墟的古代の歴史的核というべきものである。ただその間にあって現穴太市街は中世末から近世にかけては阪本と結ばれ，現在でも行政上は大津市上阪本の穴太になっている。

つぎに現大津市域の学区別にみた昭和45年国勢調査当時の人口及び産業別人口数をあげるとつぎの如くなる。

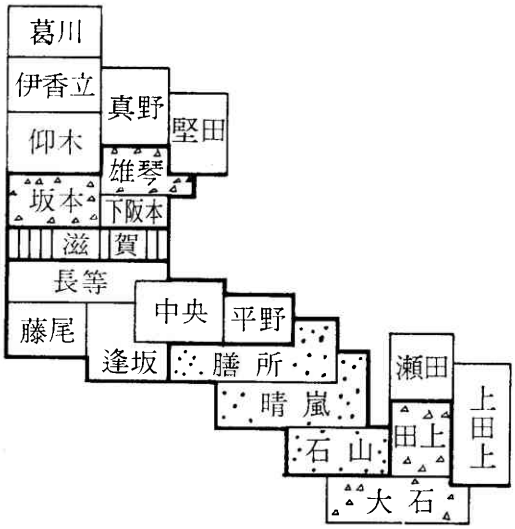


第1図　大津市域における歴史的核

学　区	世帯数	人　口	産業別就業者数（15才以上）	第1次	第2次	第3次
大津市	51,341	166,804	78,202	9,435	29,696	39,071
葛川	239	906				
真野	539	2,403				
仰木	601	2,733	8,496	3,274	1,936	3,286
伊香立	732	3,263				
堅田	2,027	7,592				
雄琴	678	2,423	1,385	374	216	795
坂本	2,930	10,329	3,990	506	1,534	1,950
下阪本	1,102	4,213	2,964	429	663	1,872
滋賀	4,583	13,122	4,054	444	1,145	2,465
藤尾	1,080	3,370	1,324	60	554	710
長等	4,287	13,595	7,380	218	1,653	5,509
逢坂	3,250	9,885	5,097	23	1,533	3,541
中央	2,291	7,858	4,241	7	1,004	3,230
平野	2,708	8,911	4,208	48	1,571	2,589

膳　　所	7,590	22,471	10,792	244	5,848	4,700
晴　　嵐	6,760	17,766	8,764	215	5,309	3,240
石　　山	1,817	6,494	2,011	402	709	900
大　　石	502	2,105	1,053	418	330	305
田　　上	849	3,724	1,906	707	632	567
上　田　上	762	3,428	—	—	—	—
瀬　　田	5,753	18,832	10,537	2,066	5,059	3,412

このうち中央学区とは狭義の浜大津地区であり，平野学区は浜大津と膳所との間にあって，明治後両者の conurbation に役立った漸移地区である。ほかに葛川から堅田に至る各学区は広義の堅田学区に入れられる（第2図参照）。いずれにせよこれらの統計によると大津市全体としては第3次産業人口の比率が多い歴史的都市であることがわかる。ついでこれを学区別にみるとまず人口絶対数の多いのは膳所学区についで，その南の晴嵐学区，ついで逢坂，中央両学区を合せた旧浜大津地区，さらに湖西側では南の坂本以下浜大津迄に至る地区となる。そこで昭和45年の国勢調査時での大津市のD•I•Dの面積及び人口並びに市全体に占める比率を示すとつぎの如くなり④，さらにこの範囲を斜線で図示すると第3図のごとくなる。



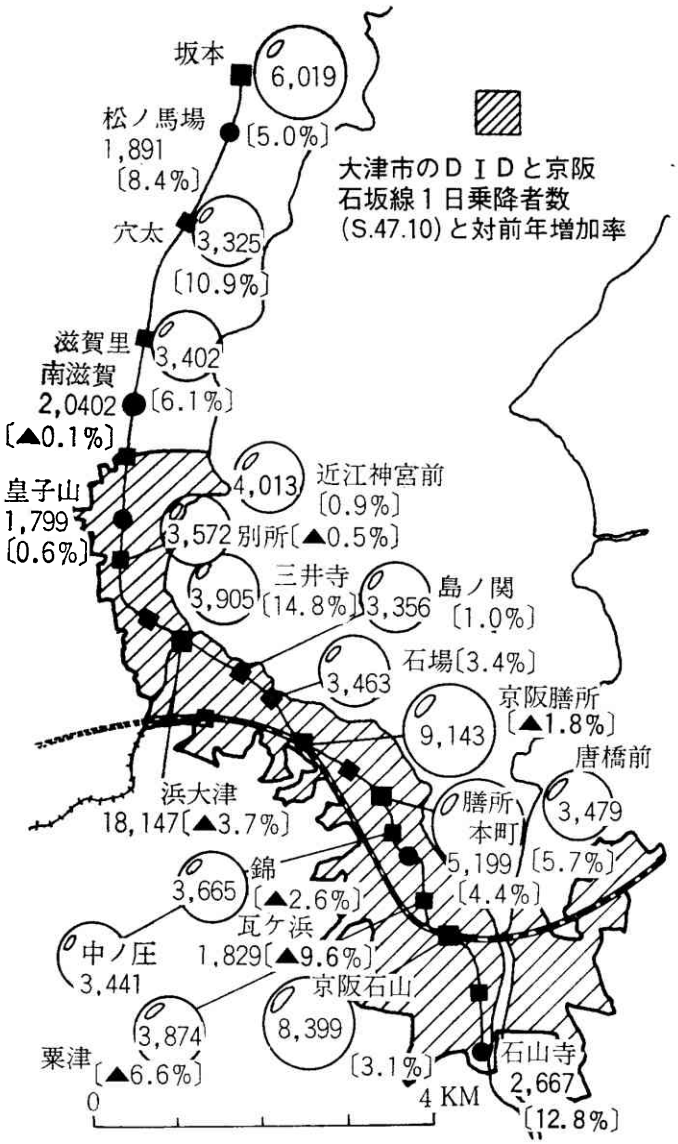
第2図　大津市域の学区別区分

人口			面積 km²		人口密度（1 km²）	市に占める割合	
昭45	昭40　人	5年間増加率	昭45	昭40	昭45	人口 昭45	面積 昭45
93,374	83,042	12.4%	12.4%	7.1	7530	54.4%	4.1%

これによると大津市は D•I•D 人口の上では54.4%で過半を占めるが，面積に至ってはわずかに4.1%にすぎず，同じ広域市ながら京都市の16.7%の¼にすぎない。さらにこれをさきの学区別の産業別人口の比率についてみても，葛川以下堅田地区までは第1次人口の占める割合が極めて多く，膳所から石山にかけての湖南地区の工業地帯に第2次人口が多いのと対照的である。

さて第3図でみるように昭和45年現在のD•I•D—人口密度1 km²当り 4,000人以上で，しかも人口5,000人以上の地域を構成する—の北限は湖西では近江神宮駅までとなっている。つまり現大津市の昭和45年度のD•I•Dは現在京阪電車の石坂線が通じている地域にほぼ合致するといってよい。そこで筆者は2年後の同電車沿線駅での乗降者数を調査してみた⑤。第3図のドット中に1日の乗降者数を記した。これによると京阪三条線が交叉する浜大津駅を除くと第1位は国鉄と交叉する京阪膳所駅の9,143人，ついでやはり国鉄と交叉する京阪石山駅が8,399人となって第2位，第3位がじつは坂本駅の6,019人となる。ところがこれを前年との増加率をみると各駅ともいずれも減少しているのに対して坂本では

増加率5.0％をとる。ほかにこの場合は，滋賀里駅6.4％となって湖西側に増加の傾向をみる。これは近年における湖西側の住宅団地の激増に負うている。うちここ数年間では近江神宮駅までの増加が著るしく，ために上掲の昭和45年度のD•I•Dの北限を形成することになったのであるが，以後は目下それ以北に都市化が進行していることがわかる。穴太，松ノ馬場両駅はいうまでもなく行政上は上坂本町に所属する。ところが本昭和49年7月から江若鉄道の後をうけて国鉄の湖西線が開通することになり，今後はさらに下阪本は勿論のこと，湖西側での坂本以北の都市化の進行が予想される。しからばつぎに歴史時代の阪本と明治以後のその変貌についてみよう。



第3図

(3) 歴史的核坂本の過去と現在

現在大津市上坂本の中には延暦寺日吉神社の門前町としての坂本本町と，「延喜式」にみる北陸道穴多駅のおかれた穴太がふくまれる。景行，成務・仲哀三天皇の高穴穂宮がおかれた穴太部落は，対岸に居住していた帰化人の天日槍とも関係が深く，中世後も古西近江路の交通集落として栄え，やがてここには安土城や上坂本にある延暦寺の里坊の石垣をきずいた石工の居住地ともなった。また中世末その西南方の壷笠山に山城が構築された場合の旧城下町をも形成することになった。現在上坂本にではなく穴太部落に「馬場」という小字名を残こすのはその名残りであると思われる。これらの詳細についてはすでに拙文に発表した⑥からここでは省略する。今はいばらが多く，石墨の若干をとどめる壷坂山城（420.4m）はもとは叡山防備のための延元年間の築城とされるが，その後織田信長の叡山焼打後，今度は叡山監視の目的で明智光秀が光春をしてここに拠らしめ，光秀が元亀2年（1571）下阪本の湖畔に坂本本城を築いたのに対し山城的な性格を有していたものである。従って穴太はまた下阪本とも深い関係があったようである。ところで上下両阪本部落についてはともに関係が深く，下阪本は延暦寺の外港で中世にあっては北陸各地の荘園からの貢租米の湖上輸送による荷揚港であり，かつは西近江路に沿う街道集落であったのに対して，上坂本は延暦

第4図　地形図にみる壺笠山と坂本

寺，日吉神社の門前町として叡山に居住する僧侶や寺への物資の供給地として栄えたことはいうまでもない。しかも元来日吉山王大社は比叡山の地主神，天台宗の護法神として延暦寺と密接な神仏習合の関係を形成して来た⑦ふるい神社である。さらにこの祭神は大山咋神であることが『古事記』に出ている。建暦元年（1211）日吉神社の火災によって坂本の在家2千余戸が灰燼に帰した様子が文献に見える⑧が，その頃の町の様子等をしるした絵図等は存在しない。叡山文庫には「湖辺の図」，「滋賀院領之図」その他可成りの絵図が保存されているが，それらはいずれも江戸中期以後のものである。しかも絵図によると上下阪本間には田圃が横わり，両者間のコンナベーションは形成されていない。また光秀の坂本城の範囲についても不明で，郷土史家の津田幸種も字名の「城畔」，「的場」，「城」，「お馬屋敷」等を指摘する⑨が，現在東南寺前の坂本城趾の碑のある箇所を中心として，東は琵琶湖畔にのび北は酒井神社の北，西は酒井両社神社をふくむやゝ西のあたりまでと思われるが，地籍図からする復原はなかなか困難である。けだしこの下阪本の町は元来西近江路の宿駅兼湖港として発達し，城下町として発生した町ではないからである。その城下町としての生命も元亀2年から天正10年（1582）に至る10年間以上も存したのであるが，本能寺の変後の廃城によって，建物は来迎寺その他大津城に移行され，もとより町の具体的様子を物語る絵図は現存していない。ただその間にあって，坂本城下の中心地を通ったと思われるその名も「大道町」あたりの街道筋は軍事的目的もあって曲折して遠見遮断を形成，ふるい近江路の宿場兼湖港集落が，城下町の設立に伴って改変されたのではないかと思われる。さらに伝教大師が開祖だといわれる現東南寺に残こる無数の石仏等は明智家の家臣団その他ここの住民への供養塔と思はれ，さらに同寺の東にのこる明智塚や，水田中のあちこちに残こる石垣趾等は，ここに家臣団の住居があったことを知らしめる。結局坂本城の本丸はこの東南寺を中心とした地区におかれたものであろう。又付近には分

流が多く，坂本城は水郷に浮かぶ城を形成していたもので壺笠山の山城と対をなしていたのなのである。その他，上述の地名に関連するのであるが，現在京阪電車駅の「松ノ馬場」から酒井神社に至る東西の道路はこの付近に穴太とは別な坂本城下の馬場が存在していたことを物語る。

これに対して比叡山麓の湖岸段丘上を被覆する大宮川の谷口扇状地に位置する上坂本は同扇状地の分流が当時の寺や民家の飲料水をなし，ここでは穴太から足利家に因縁の深い盛安寺―穴太積の石垣―前から日吉大社に至る南北の街道と，山王社から下阪本に至る東西の道路を基準にして100寺以上存在した―（但し，明治はじめの「共武政表」の統計によると阪本村163下阪本村15とあるが現在の坂本では現存するものは48）一里坊を，門跡のいた滋賀院御殿を中心に基盤目型に配置したものと思われる。そして上述の南北街道に沿って旅籠屋や延暦寺，日吉神社の物資を商う町家が列んでいたものと思われる。

ところが坂本の人口に関しては上掲の平沼の論文によって建暦元年日吉神社辺の火災により2千余戸が灰燼に帰したとすると，江戸時代にはずいぶん人口が減じていることがわかる。すなわち叡山文庫その他の記録統計によると享保11年（1726）の上阪本の町方（四町）1,797人，寺社504人，他合せて2,503人に対して，下坂本は1,962人となっていくぶん下阪本がすくないが⑪，これらを明治11年以後の次頁の表と対比しても上坂本に較べて下阪本の方がいくぶん衰たいの傾向をとっている。

つぎに明治後から現在に至るまでの両坂本の変化についてみる。まず明治13年の「滋賀県物産誌」によると坂本村〝農580軒，傍ラ茶ヲ製シ筵ヲ織り或ハ雑商又ハ車夫等ヲ事トスルモノアリ，工20軒，大工挽引或ハ桶職等ナリ，商35軒，造酒造醤油其他呉服小間物旅籠屋飲食店等ナリ〟とあり，一方下阪本村については〝西近江路村内ヲ貫通シテ水路亦舟楫ノ利アリ水陸運漕ノ便ナルコト近郷諸村ノ及バザル所トナリ〟とあり，ここの人戸319軒のうち〝農317軒，傍ラ漁業或ハ採薪及ビ染物ヲ事トスルモノアリテ各異ナレリ〟とあるのみで，商業等の様子が明かではない。明治12年の「共武政表」によると人力車の数は坂本村5，に対して下阪本村14とあり，さらに現地をヒヤリングすることによって，ふるくは旅籠屋や問屋だったと称る家並みを見ることが出来る。そこで現景観から明治時代を推測してみる。まず第5図に見るごとく，酒井，両社神社前の松ノ馬場通りを東の湖岸まで出た戸津ケ浜には太湖汽船や湖南汽船の乗り場があって，ながく浜大津その他の間を往来した。而してこの松ノ馬場通りと西近江路と交わる地点，すなわち四ツ辻に北国への道標があり，「ふもとや」その他の旅籠屋があった。また七本柳浜付近には今もなお材木問屋があり，ここは日吉神社の御旅所であり，4月13，14日の祭礼の折の神輿の乗船場となっている。ここから北比叡辻までを湖上渡御して，神霊は山王馬場通りを日吉神社まで還幸するのであり，今もなおこの山王祭は滋賀県の代表的な祭りの行事としてつづけられている。その他屋号をもつふるい商家も可成りあり，寺院が多く残っていることも下阪本の特色である。また町の南はづれの唐崎は大津京時代の外港であり，ここの唐崎の松は近江八景の1にもかぞえられた。付近にはまた日吉神社の第一神門がおかれている他，唐崎神社には江戸時代の灯籠が寄進されている。これらの様子は文化11年（1814）刊行の「近江名所図会）にもしるされ，例えば「七本柳」については〝柳七本生ひたり。故に號く。七社の神輿乗船の浜なり。但し柳は八本にて，高札の表にも八本柳と記したり〟，また唐崎明神については〝山王大宮初めて現はるゝ地〟と説明している。同絵図に山王神幸の図が出ていることはもとよりのことである。

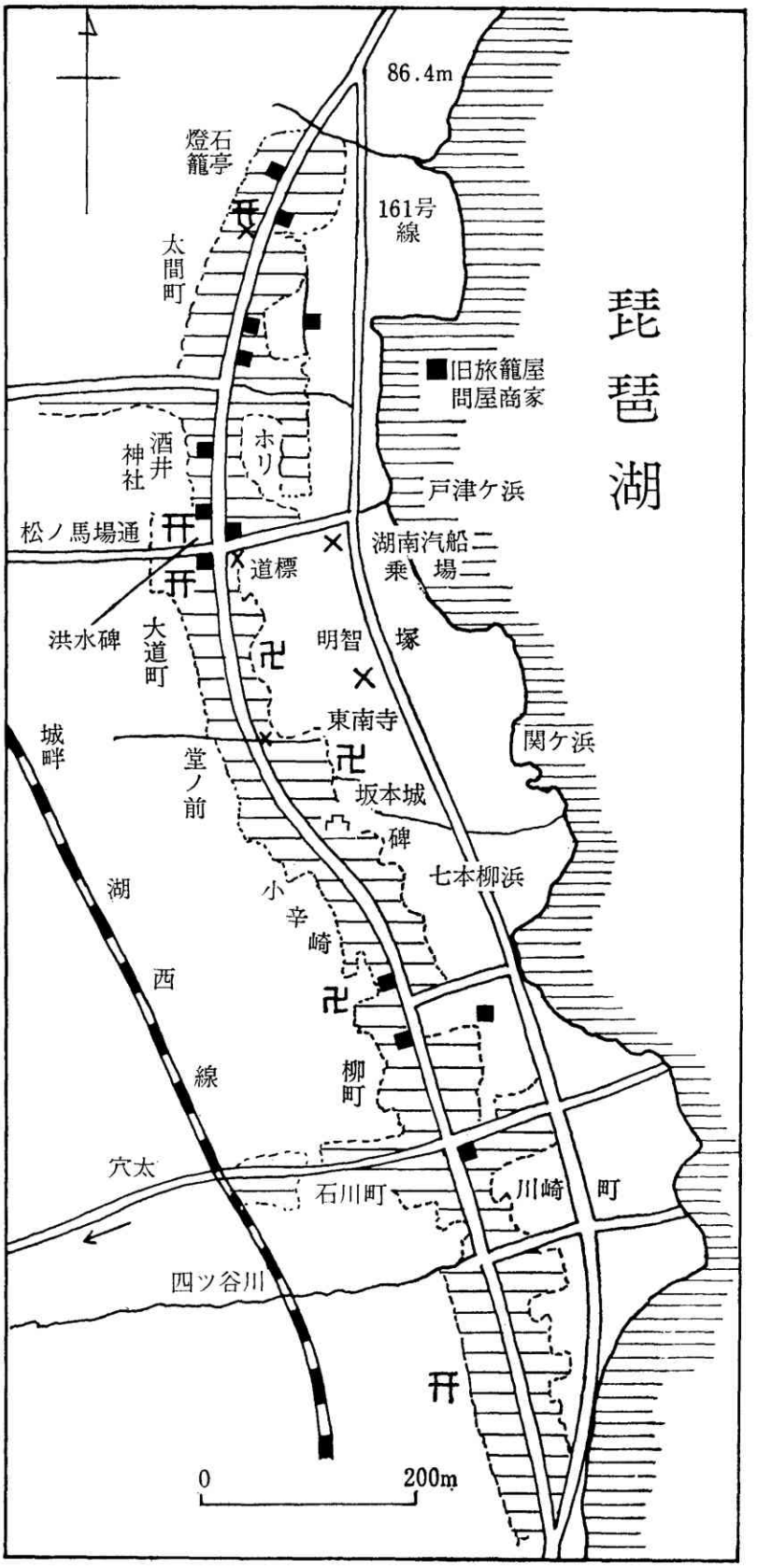
	M. 11	T. 10	S. 10	S. 35	S. 38	S. 47	S. 48
坂本学区	3,571 (726軒)	3,934	4,687	6,873 (1,531)	7,821 (3,866)	11,343 (3,111)	11,566 (3,212)
坂本本町	3,119 (635)			6,132 (1,362)	6,376 (3,415)	8,340 (2,252)	8,552 (2,342)
他					107 (107)		
穴太町	452 (91)			741 (169)	707 (158)	1,199 (358)	1,295 (402)
他					631 (186)	1,804 (501)	1,719 (468)
下阪本学区	2,090 (359)	2,262	2,886	4,707 (782)	4,714 (1,624)	4,574 (1,187)	4,759 (1,269)
下阪本	1,841 (319)			4,475 (733)	3,343 (682)	3,557 (910)	3,685 (972)
比叡辻	249 (40)			3,232 (49)	562 (133)	636 (174)	677 (189)
他					809 (809)	381 (103)	397 (108)

これに対して上坂本でも，南北街道一俗称北の北国町通り一筋には今にふるい伝統をうたう〝○○そば〟屋をはじめ，各種の屋号をもつ商家，旅籠屋の家並みが残こり，今は石垣のみとなった廃寺坊もみられる。

いずれにせよ歴史的都市坂本の繁栄期は中世にあったことはいうまでもなく，上にはのべなかったが港市としての上坂本（東坂本）の経済交通上に占める位置が中世の堺や兵庫に必敵すべきものであったと中村直勝はのべる。氏は坂本の馬借が京へ山中越によって運搬する江州米の売行きが鈍ることから大挙して暴動をおこさんとしたことや坂本における関銭のことを述べる。さらに〝港市の宿屋は単なる宿泊業者ではない。其所は一種の取引所でもあれば，物品の委托販売者でもあり，仲買人でもあれば，運送業者でもあった⑪，とする。一方この馬借について牧野信之助は「唐崎」比叡辻馬借点走，当浦之舟自唐崎村戸津比叡辻了，毎月馬二百疋，計車二十輛」とある「日吉社室町殿御社参記」の一文を紹介している⑫から下阪本の比叡辻や戸津ケ浜に馬借がいたことがわかる。

しかしこの歴史的都市坂本は明治後は寒村と化し，昭和26年4月になって漸く大津市域に編入されて村から町となった。ところが大正10年3月に近年廃止された江若鉄道の三井寺下叡山間の工事がなされるとともに下阪本と浜大津との結びつきが出じ，さらに大津電車坂本線が昭和2年8月に開通，同年比叡山鉄道ケーブルカーが坂本から延暦寺に通じてからは上坂本も衰たい化をまぬがれることになった。これよりさき明治20年には湖南汽船が堅田以南の諸港と浜大津間を結び，同27年に大津坂本間に定期航路が開かれていたが，上掲電鉄の敷設によって次第に衰たいしていった。このため例えば大正9年（1920）と昭和5年（1925）の5ケ年間における人口増加をみると，滋賀郡の割合は次頁の如くなり⑬電車開通のためか坂本や下阪本村が滋賀村よりも多いことが知られる。しかし何といっても湖南の工業地帯や旧城下町膳所やその後東洋レーヨンのおかれた堅田等とは比較にならない。しかも滋賀郡の36.5%の増加率は滋賀県下の各郡中最高であり，下阪本村の30.2%は現大津市域編入の栗太郡瀬田町の32.3に近かく，瀬田町また栗田郡中での最高位を示している。以後昭和10年には前掲表のごとくあまり変化はなく，むしろ下阪本村は減少の傾

向を示している。ところが，ここ10年間の傾向は前頁の表でもみられるように旧村周辺での団地化の傾向が著るしく，例えば同表の坂本学区についていうと昭和47年現在の穴太町1,199人のほか，他として1,804人とあるのはじつは高穂団地をはじめとする市営その他団地の新設に伴い京阪電車やバス利用の京都大阪への通勤者が増加したことを物語っている。これを農家の専兼業別についてみても，坂本学区の333戸，下阪本の299戸のうち専業農家はそれぞれ6及び3戸で，他は全部兼業農家であり，しかもその殆んどが第2種兼業農家となっている。ところがこれを新設の団地という点からすると，上の昭和はじめの統計表からはなお坂本村よりも増加率が低くかった滋賀村の近年における人口の社会的増加は著るしいものがある。昭和40年～45年の5年間における学区別増加率はつぎの如くなってい



第5図　下阪本のふるい街道集落

	大正9年	昭和5年	増加率
滋賀県	651,050	691,631	6.2%
大津市	31,453	34,379	9.3
滋賀郡	41,394	56,542	36.5
石山町	3,613	7,384	104.3
膳所町	7,562	14,679	94.1
滋賀村	2,794	2,929	4.8
坂本村	3,934	4,628	17.6
下坂本村	2,262	2,947	30.2
雄琴村	1,343	1,522	13.3
仰木村	2,238	2,227	− 0.4
堅田町	3,489	6,164	76.6
真野町	1,690	1,717	1.5
伊香立村	3,114	3,077	− 1.1
葛川村	1,441	1,307	− 9.2

地域	昭和40年人口	昭和45年人口	増減率
北部	31,598	34,366	8,8%
葛川	876	801	△ 8.6
伊香立	3,222	3,134	△ 2.7
真野	2,207	2,415	9.4
堅田	7,358	7,686	4.5
仰木	2,729	2,666	△ 3,2
雄琴	2,396	2,552	6.5
坂本	8,993	10,854	20.7
下阪本	3,817	4,258	11.6
中部	79,655	82,536	3.6
滋賀	10,766	15,261	41.8
藤尾	2,857	3,862	35.2
長等	14,808	13,713	△ 7.4
逢坂	11,316	10,155	△10 3
中央	8,508	7,584	△ 7.7
平野	9,027	8,983	△ 0.0
膳所	22,373	22,978	2.7
南部	46,507	54,837	17.9
晴嵐	16,514	18,249	10.5
石山	4,171	7,877	88.9
大石	2,016	2,111	4.7
田上	3,479	3,746	7.7
上田上	3,494	3,439	△ 1.6
瀬田	16,833	19,415	15.3
総数	157,760	171,739	8.9

る。[14] これによると中部地区たる旧大津市街の人口は目下むしろ減少の傾向をとるのに対して周辺地区での増加の傾向が著るしいことがわかる。これを坂本についていえば20.7%で，ふるい膳所の2.7%に較べると比較にならないし，湖西では目下滋賀学区の41.8%が目立つ。つまり旧市街を中心としたD•I•Dがすでに飽和状態になり，目下は昭和45年度におけるD•I•Dの北限であった近江神宮駅から滋賀里をへて坂本に向って conurba-tionが進行しつつあるといってよいのである。さらに今後は京阪の坂本以北が本年度開通の湖西線によって都市化が進行することであろう。

む す び

もと浜大津にあった大津市役所は現在では旧大津京域南端長等地区の皇子山におかれている。ここにはスポーツセンターもあり，本年度は京阪石坂線と交叉する地点に国鉄湖西線の西大津駅がおかれ，ここに将来の大津市の行政の副都心が形成されんとしている。このことによって従来は浜大津との間に水田で劃されていた湖西の坂本地区との間に住宅地域が増加することによって conurbation が形成されていくであろう。さらに湖南についていえば目下人口の decentralization の傾向をとる浜大津の旧市街は依然として歴史的商業都市としての伝統を保つ一方，湖岸の埋立地域背後の

段丘上にある滋賀県庁の存在とともに銀行や官庁の出先機関，文化施設等が進出し，さらに浜大津そのものは琵琶湖への観光船の発着所としてのふるい湖港に新しい機能をそえるであろう。一方膳所は旧城下町であり，もともと商業的機能を浜大津にゆづっていたため，その後 conurbation の完成とともに今では浜大津市街の周辺部になっている。これに対して南の石山，瀬田地区には東洋レーヨン滋賀工場をはじめ近年では電機，化学その他の近代的工場地帯が形成された。瀬田町の低位段丘面にはかつて近江国府が存在し，その廃墟の横に今では団地が形成されている。

かくて歴史的広域都市大津の場合，かつての歴史的核は往時の機能を変化させながらも今に生きている。すなわち天正13年坂本城は秀吉の命によって浜大津に移城されたが，さらに慶長6年家康は大津城を膳所に移築した。以後浜大津には代官所がおかれたが，浜大津は東海道五十三次の宿場兼百艘船の湖上輸送の湖港として栄え，明治後の行政的中心は浜大津におかれて今日に到っている。さらに現在ではかつての廃墟都市大津京域に市役所を中心とした副都心が，さらに旧近江国府付近が工業地域になり変ろうとしている。本文ではかつての歴史的核の1つである門前港市坂本の場合を中心として述べた。膳所や浜大津については，短文を発表した⑮ こともあるからそれらを参照せられたい。

〔注〕

① E. W. Burgess & R. E. Park: The city. 1925
H. M. Mayer & C. F. Kohn: Readings in Urban Geography. 1959
② 『日本国勢図会』1974
③ 大津市，「大津市統計年鑑」 昭和45年度
④ 総理府統計局，『わが国の人口集中地区』 昭和46年
⑤ 京阪電鉄本社（大阪）の統計による。
⑥ 藤岡謙二郎，古西近江路に沿う穴太部落の歴史交通地理学的性格について（小牧実繁先生古稀記念『人文地理学の諸問願』 昭和43年
⑦ 景山春樹『比叡山』（角川新書） 昭和41年
⑧ 平沼淑郎，山門領門前町近江坂本について(「早稲田商学」9の2） 昭和8年
⑨ 津田幸雄，『ふるさと』 昭和40年
⑩ 小牧実繁監修，『大津市史』別巻 昭和38年
⑪ 『滋賀県市町村沿革史』第2巻（昭和42年），第5巻（昭和37年）及び叡山文庫蔵の「上下阪本人数改帳」等
⑪ 中村直勝，港市としての坂本（『小川博士，還暦記念史学地理学論叢』） 昭和5年
⑫ 牧野信之助，『土地及び聚落史上の諸問願』 昭和12年
⑬ 小牧実繁ほか，『近畿地方市町村別人口増減図』（大正9年—昭和5年） 昭和11年
⑭ 大津市企画室広報統計課，大津統計グラフ（昭和45年国勢調査持集）
⑮ 藤岡謙二郎，城下町膳所と浜大津（『地形図に歴史を読む』第3集）昭和46年
矢守一彦，膳所の城下町（F. H. G. No. 36.）1974

〔付記〕 坂本と大津といえば夫々小牧実繁，中村直勝両先生の故郷である。40年前の学生時代に両先生に提出したのと変らないこの短かいレポートを両先生に捧げ，既往の学恩に深謝したい。（昭和49年度夏休み）